隠岐方言の間投表現について

神部宏泰

本稿は、隠岐方言の間投部の、文表現上の機能を明らかにするのが目的である。

一

隠岐島の生活語を、いま隠岐方言として把握する。

隠岐島は、山陰の北方海上に位置し、通常、「島前」と「島後」との両地域に大別される。

「島後」には、南端に、当地域の中心地である旧西郷町がある。同町は、隠岐支庁の所在地であり、隠岐定期連絡船の基地でもあって、本土との交渉も比較的盛んである。いわば、政治・経済・文化の諸面で、辺境地域に与える影響力は大きい。

右の旧西郷町に対する北辺西辺の諸地域は、一帯の山地によって限られ、古来、比較的孤立しがちな土地がらであったと解される。現に、あい隣接する部落であっても、いくらかのことばのうえで、何らかの変相の観察されることも稀ではない。総じてその生活語は、より後進性をみせがちである。

「島前」は、「西」「中」「知夫里」の三島より成り、その方言状態もかなり複雑である。特に、南端の離島「知夫里」は、異色を示すことが多い。「島後」の方言状態とのあいだにも、ある差異が認められる。が、概して言えば、「島後」南部と「島前」西の島の方言状態は、比較的似よりをみせていると言ってよかろう。

間投部の表現の記述は、「島後」北西部に位置する五箇村の生活語——五箇方言での状態を中心に進めていくことにする。五箇方言は、いわば、受動的な古脈性を特質とする点で、隠岐のなかでもきわだった方言の一つである。(拙稿「隠岐島五箇方言分派について」八日本の方言区画〉参照)

二

ここに間投部というのは、例えば、

○エマワ ケー ゴザラヌ。 今は、ほんとに、ありません。

の文表現における「ケー」のように、文中に、自由に間投される「遊離独立」の要素を指している。

右の「ケー」は、指示代名詞「これ」に由来する。が、この表現でもみられるように、間投用法が習慣的であるうえに、形も特定化

していて、もはや、指示代名詞として認めることは困難になっている。このことから、「ケー」の類は、品詞論的には「間投詞」として認定することが有効である。(藤原与一先生「方言学」九〇ぺ参照)

言うまでもなく「間投詞」は、国語品詞として立てられていないのが一般である。が、話しことばの分野においては、この種の要素の活動に注目しないわけにはいかない。早く杉山栄一氏も「国語法品詞論」において、例えば「今度の発車は、エエト、十四時二十分です。」(九九ぺ)の「エエト」の類を、「間投詞」と称すべきことを提案している。また、「話しことばの文型(1)(2)」(国立国語研究所)でも、「間投詞」の活動に言及しているのである。

文の機能上の特定要素としての間投部は、品詞論的な立場からみれば、上述のような間投詞によって成り立つことが多い。(間投部は、他に、例えば対称の人代名詞によっても成り立つ。)間投詞には、話し手の、特定の感情・意識が、直接的にうち出されるのが普通である。間投詞の立つ文表現は、当の、間投詞の色調によって特色づけられる。換言すれば、文表現の特色が、いわば頂点的に、間投詞——間投部に表示される、とも言えよう。この意味からすれば、間投詞——間投部は、文表現の機能を把握する、一つのポイントなのである。

隠岐方言でも、右の間投詞がみられるが、注目されるのは、指示代名詞「これ」「それ」からの転成とみられる、一群の間投詞の活動である。本稿では、特にこれらの間投詞をとりあげ、主としてその表現機能について、記述を進めていくことにする。

三

三ノ一　はじめに、「これ」系の間投詞をとりあげる。ここには、「ケー」〔kei〕・「カェー」〔kæi〕・「コー」〔koi〕などが認められる。以上の諸形のうちで、全域にわたり、最も頻用されるのは、「ケー」である。隠岐では、全般に、いわゆるラ行音(特にri・re・ru)が不安定で、とかく変相を示しがちである。右の「ケー」も、「コレ」の「レ」の、子音脱落がもとになって生じた形(kore＞koe＞kee)であることは明らかである。

五箇方言で、「ケー」は、次下のようにおこなわれる。

○エ|マダニ　ケー　コ|コロガ　ス|タラン　トコダ。　いまだに、ほんとに、〔倹約〕の心がけがなくならないのだ。

○スッパリ　ケー　シ|ニタエテ　シマウ　ダ。　すっかり、ほんとに、死にたえてしまうよ。

○ソエデ　ケー　ニ|ドト　ソ|ダナ　コト　ゴザ|ラヌ。　それで、ほんとに、二度とそんなことはありません。

○ソエコソ　ケー　ワキャ　ゴザンヘヌ。　それこそ、ほんとに、わけはございません。

右の諸文は、いずれも話し手の判断・確信、さらに言えば主張の表現である。「ケー」はここに立って、当該の文表現の、右の特性を、頂点的に表示しているのである。さて、「ケー」には、一種の強調性が認められる。この強調の情意が、話し手の主張の表現を決定づけているとも言える。第二例の「スッパリ」、第三例の「ニドト」、および第四例の「〜コソ」など、一文の強調にあずかる諸要素が、「ケー」との関連のもとに見出されるのも偶然ではない。いわば、

「ケー」は、特定文表現にあって、話し手の、主張的な情感をひきいる、特殊な機能をみせているのである。

○ドーント ケー タンボモ ナニモ ケー アカドロニ ンマリョーッタデス。全く、ほんとに、〔洪水で〕田も何も、ねえ、赤土に埋まっていました。

○オジーサンガ ドーント ケー ガメテ ケー ヨワリマシタ。おじいさんが〔息子の戦死の報を聞いて〕全く、ほんとに、気を落として、体が弱りました。

自己の確認事実を、回想的に表現したものである。いわば、ここでも、文表現の、話し手中心の一方的な「持ち出し」の訴え、もしくは主張の情意を、「ケー」が、文中にあって、頂点的に表わしているとみられる。

以上のような、間投詞「ケー」と、これのおこなわれる文表現の、末尾に立つ文末詞および文末詞に準じるものとの間には、一定の対応関係の認められることがある。文末詞は、文表現を最後的に統轄し、特色づける、特定の文末要素である。間投詞の機能も、文末詞のそれに近い。ここで、一文表現上における両要素の対応関係に注目することは、当面の間投詞の機能を、より深く追究するうえにおいても、意義があろう。

○ノンデ ケ サワイデ ケ ヤルデス ワー。飲んで、ねえ、騒いで、ほんとに、楽しくやりますよ。

○クワデ オッテ ケー ダエダエ タノマズニ ケー ツクッテ ケー キョーシツ シマシタ ワナ。鍬で〔田〕を耕して、ほんとに、誰も、頼まないで、ねえ、〔稲を〕作って、供出しましたよ。

○ソエコソ ケー エワエヌ タガ メゲマシタ ワナ。それこそ、ほんとに、話しに、ならないほど〔洪水で〕田がこわれましたよ。

「ケー」のおこなわれる文表現には、右のように、「ワ」類の文末詞のみられることがある。「ワ」は、「われ」に出自が求められるだけあって、主張性、あるいは自己表出性——とでも言い得る特性を示すのが一般である。すなわち、右の例文にあって、「ケー」と「ワ」とは、機能上、ほどよい呼応をみせて、存立しているのである。

○シノルマデ ケー ホンマニ ケー ワシャ シンジンニ コッチョルケー。死ぬまで、ほんとに、ねえ、私は信心に熱中しているから。

○モーケ シェニャー ケー オチニ オルヤナ キガ シェンダケ。

金もうけをしないと、ほんとに、家にいるような気がしないから。

間投詞「ケー」のおこなわれる「自白」の文表現には、文末に、また、右のように、「ケー」「ダケ」などのとられることがある。この「ケー」「ダケ」は、ひとまず順接の接続助詞とすることができるが、文末用法もかなり習慣化していて、文末詞に準じる機能をみせるようにもなっている。話し手自身の自白表現である、右の表現の末尾の「ケー」類には、一種の主張性が認められる。いわばここにも、間投詞「ケー」との、一定の呼応関係が指摘される。

以上によって、間投詞「ケー」の示す、自己主張的な機能が、ほぼ明らかになったと思う。「これ」系間投詞のこのような機能が、指示代名詞「これ」の、話し手圏内の事物として認識・限定する特

性に基づくものであることは、多く言うまでもない。ただ、間投詞として転成した「ケー」は、特定事物を指示する機能のうすれた、より感声的なものとして存立しているのである。

三ノ二「ケー」は、隠岐全域に、ひろくおこなわれ、盛んである。

○ワシラー　ケー　シゴトガ　ケー　アバカンケー。　私なんか、ほんとに、仕事が多くて動きがとれないから。

○スッパリ　ケー　エワワヌ　コトニ　ナッテ　シマッタ。　すっかり、ほんとに、祝わないってことになってしまった。〔年祝い〕

前者は「島後」西郷、後者「島前」西の島の例である。

「これ」系間投詞に「カェー」のあることは先述したとおりであるが、これは、「島後」にあっては、主として都万村（五箇の南西部に隣接）を主域とする西部地域に、「島前」にあっては、主として西の島中部および中島地域にみられる。

○ワシモ　カェー　ワガ　トコノ　ジーサンガ　ヤンデ　ノー。　私も、全く、私のうちのおじいさんが病気してねえ。

都万の例である。「ケー」「カェー」併用地域における両者の勢力関係については、一概に言えないが、若い層では、全般に、「ケー」が優勢か、もしくは優勢におもむこうとしているかのようである。

「コー」は、「島後」西部地域で、わずかに観察されるにすぎない。

四

「ケー」は、文頭および文末にもおこなわれる。次下は、五箇方言の例である。

○ケー　ワスレタ。　あっ、忘れた。

○ケー　ホンニ　ソノママ。　いや、もう、ほんとうに〔借金は〕そのまま。

○ケー　スッパー　カエマシタケ　ノー。　いや全く、すっかり枯れましたからねえ。

文頭の「ケー」である。この「ケー」が、先述の間投詞「ケー」と、同工の成立にかかわるものであることは明らかである。これを、間投詞の、文頭用法とすることができなくもない。〔話しことばの文型(1)〕五四ぺ参照〕しかし、文頭に位置して、全文の表現性を大きく決定づけている点もみのがせない。それに、間投詞を、文中間投の要素として厳密に受けとるならば、これは、しばらく感動詞とみておかねばなるまい。「ケー。」（ちくしょう。）のように、単独で発現し、かつ一文として把握し得る表現もある。が、両者は、もとより類縁の機能体なのである。

文中・文頭の「ケー」成立の先後関係を言うことは容易でない。文頭の「ケー」の後生（すなわち、文中の「ケー」の転用）を考えたいが、また、文頭の代名詞が、そのまま感声化したとするみかたも、できなくはない。いまは、間投詞の活動の大きさを、改めて指摘するにとどめておきたい。

「ケー」の文末用法も、次下のように指摘される。

○ナンダ　ケー。　なんだ、全く。〔何を言ってるんだ。〕

○ユーコト　キカン　カ　ケー。　言いつけを聞かないか、ほんとに。

○シカケチョー　ワナ　ケー。　やりかけているよ、ほんとに。〔うるさく言わなくても。〕

いずれも、話し手の腹だたしさをぶちまけた表現である。文末の

「ケー」には、こうした強い一方的な感情が、最後的に結集しているとみられる。「ケー」の前に休止はなく、一気に言い下される。

この「ケー」も、もとより先述二者（間投詞・感動詞）類縁の機能体である。これを、感動詞の一用法と、みることもできるかと思う。が、文末での用法が比較的固着的である。この点で、文末特定要素、すなわち文末詞――化の過程にあるものとすることができよう。

以上のように、間投詞「ケー」類縁の事象の、はばひろい用法を認めることができる。

この用法は、また隠岐全域にみられる。

○ケー　ガメタ。　いやもう、疲れた。
○ダマラン　カ　ケー。　だまらないか、ほんとに。
○ワカランクシェニ。ホントニ　ケー。　わからないくせに。ほんとに、もう。

前二例は「島後」西郷、後例は「島前」中の島のものである。

五

五ノ一　ついで、「それ」系間投詞をとりあげる。ここには、「ソエ」〔soe〕、「ソー」〔so:〕、「シェー」〔ʃe:〕、「サー」〔sa:〕などが認められる。

以上の諸形のうちで、最も使用頻度の高いものは「ソー」である。

○ミンナ　ソー　アルイテ。　みんな、ねえ、歩いて〔行ったものです。〕

ついで「ソエ」があげられる。「ソエ」の表現には、いくらか改まった律気さがあって、主として老年層におこなわれる。

「ソー」は、「ソレ」の「レ」音の変化がもとになって生じた形であると推察される。これを、あるいは「その」の転訛形とみるむきがあるかもしれない。が、当地方で「その」が、間投部に立つことは、まずない。一方、「それ」の転訛形である「ソエ」は、上述のとおり、老年層などに盛んである。五箇のある老婆は、昔の物価について、「コメ　エッショーガ　ソエ　ヨンシェンデ　ゴザンシタケノー。」（米一升が、ねえ、四銭でございましたからねえ。）と語った後、すぐ続けて、「ジッシェンモ　モッチョリャ　ソー　ナンデモ　カワレマシタケ　ノー。」（十銭も持っていれば、ねえ、何でも買えましたからねえ。）と語っている。ほぼ同趣の内容を述べた前後二文で、「ソエ」「ソー」のおこなわれている事実は、「ソー」が、「それ」系の事象であることを示していよう。

五箇方言で、「ソー」「ソエ」は、以下のようにおこなわれる。

○エ゚ケカン　ナルト　ソー　ガッコエ　ヤリマスケー。　適令になると、ねえ〈ご承知のように〉、学校へやりますから。
○マエワ　ソー　カネモーケガ　トボシダケ　ノー。　以前は、ねえ〈ご承知のように〉、金もうけが少ないからねえ。
○ニンゲワ　ソエ　シンボー　シェニャー　ノー。　人間というものは、ねえ〈ご存じのように〉、苦労をしなくてはねえ。
○ソエデモ　ソエ　コドモゴ゚コロデ　ノー。　それでも、ねえ、子ども心でねえ。〔いじらしいものだ。〕

右の諸文は、いずれも在外的事実の、解説・説明の文表現である。しかも、聞き手の観念に存する事実として認めたところに成立している。例えば第一例の話題は、就学に関する一般的な事実である。当然、聞き手の観念にあるものとして意識されていよう。「ソー」

はここに位置をしめて、当該の文表現の特質を、頂点的に表示していると言ってよい。ここには、聞き手に焦点を合わせようとする、話し手の意識が認められる。いわば「ソー」類は、文表現にあって、話し手の、認容的な（聞き手への特別な意識を、いま仮りに、このように言い表わす。）意識をひきいる、特定の機能を示しているのである。

さて、間投詞「ソー」類と、これのおこなわれる文表現の末尾に立つ文末詞および文末詞に準じるものとの間には、先の「ケー」の場合同様、一定の対応関係の認められることがある。

○ンマワ ソエ ゴヤクエンデス ガ↘。 今は、ねえ、五百円ですよ、ね？

○コンド ソー ワカイ モノニ ソー オシエニャ ナラノ ガー↘。 今度は、ねえ、若い者に教えなくてはならないよ、ね？

○エナカカラ ソー クルデショー ガノ↘。 田舎から、ねえ、〔泊りに〕来るでしょう、ね？

右のように、「ソー」類のおこなわれる文表現には、上昇調の「ガ」（および「ガノ」）文末詞のとられることがある。上昇調の「ガ」は、聞き手の意向に意をはらいつつ告知する機能をもっている。この種の「ガ」が、普通、告知の機能を示すと同時に、強い余情を醸し出しているのも、聞き手の意向への思い入れの深さに起因していよう。けっきょく右の文表現にあっては、「ソー」類と文末の「ガ」とは、聞き手への意識の、特別な深さという点で共通している。両者は、一つの呼応関係にあるのである。

○ホントワ ソエ シホンノ モンダエド。 ほんとうは、ねえ、〔土俵の柱は〕四本のものだけれど。

○サカヤガ ソー コココニ アリマシタエド。 酒屋が、ねえ、ここにありましたけれど。

「ソー」類のおこなわれる文表現には、また、文末に、「ダエド」（「〜エド」）の立つことがある。「ダエド」は、逆接の接続助詞である。が、右のような文末用法もかなり習慣的である。この意味で、文末詞に準じるものとすることができよう。「ダエド」の、この文末用法は、聞き手の意向をおしはかり、話し手の判断の、一方的な表出を避けようとする意識に支えられてのものである。ここに「ソー」類との、一定の呼応関係が認められる。ちなみに、間投詞「ケー」の立つ表現の文末には、右の「ガ」「ダエド」、共におこなわれないのが普通である。

以上によって、間投詞「ソー」類の、いわゆる対者認容的な機能を明らかにすることができたと思う。右の、文末特定要素との呼応の事態によってもうかがわれるとおり、間投詞は、いわば陳述に、深いかかわりをもって、存立していると言えるのである。

「それ」系間投詞の機能は、先に「これ」系間投詞の場合でも指摘したように、指示代名詞「それ」の、聞き手圏内の事実として認識する特性に基づいている。が、間投詞として認め得る事象が、表現にあたって、話し手の特殊な意識を表わす、より感声的なものとして発現している事態は、上述したとおりである。

五ノ二 「ソー」「ソエ」は、「島後」全域および「島前」南端の孤島、知夫里に分布する。さて、「島後」にあって、「ソエ」は、五箇およびその東隣りの旧中村など、北部地域一帯を分布の主域とする。既述のとおり、当北部は、受動的な古脈性を特質とする地域である。ここに「ソエ」がみられやすいのは、方言地理学上からみて

も、興味深い。

○エマデモ　ソエ　ソノ　フトタチガ　カシラエ　スワル。　今でも、ねえ、その人たちが上座へすわる。

旧中村の例である。「ソー」は、全域で盛んである。

「それ」系間投詞には、また「シェー」がある。この「シェー」も、「ソレ」の「レ」の、子音脱落がもとになって生じた形であると解される。

○ンマゴラー　シェー　カワッタ　コトダ。　今頃は（昔とくらべて）、ねえ、変ったことだ。

○フタツナラ　シェー　エチネンコータイニ　ナーダエド。（牧島が）二つあれば、ねえ、一年交替になるけれど。

五箇の例である。それにしても、この「シェー」は、西寄りの部落に、わずかに聞かれる程度で、分布の主域は、五箇の南西部に隣接する都万地域である。が、ここでも、先述の「ソー」の方が頻用される。「ソー」「シェー」両者のうちでは、「ソー」が上品である。例えば五箇西部の福浦部落では、上述の品位差が、はっきりと認められる。

「島前」では、主として中島・西の島に「シェー」（知夫里島・中島に「セー」〔se:〕も）が観察される。

○ランプデ　オッテ　シェー　ソッカラ　デンキニ　ナッタダケ　ノー。　ランプでいて、ねえ、それから電灯に変ったんだからねえ。

中島（海士村）の例である。

しばらく、「それ」系間投詞としておきたいものに、「サー」がある。その機能が、上述の「それ」系間投詞と同列のものではあるが、それにしても、「サー」の成立については、今一つ明らかでない点がある。ただ、「これ」系間投詞の例ではあるが、島根県本土部で、出雲地方に「ケー」が、石見地方に「カー」が分布する。（「ケー」は山陽側の備中地方へ、「カー」は安芸地方へとひろがる。）「ケー」にあい隣接して「カー」の観察されるのも、右の「サー」の成立に比べあわせてみることができようか。

○ミンナ　サー　オキデモ　アクシェントガ　チガイマス　ネー。　みんな、ねえ、隠岐でも、アクセントが違いますねえ。

五箇の例である。

「サー」は、「島後」にあっては、五箇の南西部に隣接する都万地域に、主として分布する。その分布状況は、「シェー」のそれに類似する。使用頻度はさらに低い。

○ツユニ　フッタ　オカゲデ　サー　デキチョリマス。　梅雨に、雨が降ったおかげで、ねえ、（作物が）できています。

都万の例である。比較的女性によく用いられる。

「島前」でも「サー」の聞かれることがある。が、きわめて少ない。その分布状況なども、いまは不明の点が多い。

○コンド　サー　シェッケーシテ　ゴザンシタケニ。　今度、ねえ、設計していらっしゃったから。

西の島の老婆のことばである。

六

「ソー」類は、文末におこなわれる。

○フトガ　ゴザル　モンダケ　ソエ。　人がいらっしゃるものだからねえ。

○ソエダケ　ソー。　そうだからねえ。
○オトシタ　カノ　ソー。　落としたの、ねえ。
○ダイブ　ウミガ　ナルー　ナラニャー　ソー。　そうとうに海がおだやかにならないとねえ。
○ハヤ　エナニャ　ソ。　早く帰らないと、ねえ。

五箇の例である。これが、間投詞と類縁のものであることは明らかである。ここには、聞き手の関心に訴えようとする。話し手の意識が、最後的にうちだされている。

「ソー」「ソエ」のうちで、文末に立ちやすいものは「ソー」である。これが「ソ」と短呼される場合もある。このことは、右の事象が、本来の語性から脱し、文末特定要素として安定化しつつある状態を示すものであろう。しかも文末にあって、文表現を最後的に統轄し、表現を決定している。このような事態からして、当の「ソー」類は、文末詞、もしくは文末詞化の過程にあるものとみることができよう。

ところで、先に、「これ」系の「ケー」の、文頭用法に注目したのであるが、当面の「それ」系の事象には、文頭用法が認められない。聞き手を意識するところにおこなわれる「ソー」は、特定の呼びかけ機能をもって文末には立っても、話し手の感情の表現としては、慣用されがたかったと言わねばならない。

右の文末用法は、隠岐全域にみられる。

○オーケニ　ナッテ　ソー。　大きくなってねえ。〔子どもをみて〕
○ミッコトモ　ゴザンシェンケ　ソ。　みることもございませんからねえ。〔本土を〕

「島後」南東部地域での例である。

「島前」の西の島・中島地域では「シェー」が立つ。（当地域に「ソー」はない。既述。）

○ハヤイ　コトニ　ナラン　ダ。ドシテモ　シェー。　早いことにならないよ。どうしてもねえ。

七

以上、隠岐方言にあって、「これ」系間投詞と「それ」系間投詞とが、あい対して存立する事態について記述してきた。現状では、前者（「これ」系）にあっては「ケー」が、後者（「それ」系）にあっては「ソー」が、主としておこなわれている。

これらの間投詞は、語源的には代名詞にさかのぼり得るものであるだけに、何程かの指示性が認められる。（先に検討した表現上の機能も、この指示性を基調としたものである。）が、それにしても、「ケー」と「ソー」とには、指示性の強弱という点で、一定の差がある。すなわち、少なくとも意味論的には、「これ」が「ケー」となって、原形に遠ざかったものよりも、「それ」が「ソー」となって、「ソ」という原形をとどめているものの方に、より多く指示性が保たれていると考えられるのである。現に「ソー」の形で、具象的な事物を指示する例がある。

○ウエニ。ソー。〔その〕上に。ほら。
○ソコノ　ムコーニ。ソー。　そこのむこう側に。ほら。

「ケー」には、このような用法がない。ただ、同じ「これ」系の「コー」は、

○コエ　サンマイダ　ガ。コー。　これ、三枚だよ。このとおり。

のように、「ソー」に類似した、比較的きわやかな指示性を示すこ

とがある。「コー」は、形と指示性とのうえで、「ソー」と同位置にあるが、使用頻度がごく低く、しかも分布領域が限られている。（既述）以上のような事態であるとすれば、「ケー」と「ソー」とは、端的に言って、もはや単純には、比較の座にのらなくなっているのである。

「それ」系で、「これ」系の「ケー」に相当するものは「シェー」である。が、「シェー」は、「島前」ではかなりみられるとはいえ、「島後」にあっては、西部地域に、わずかに分布するにすぎない。一体、音韻変化の自然という面からみれば、「それ」系にあっても、「シェー」の盛行が、もっと期待されてよい。現状がそうでないのは、「シェー」への変化を規制する、何かがあったと考えなければなるまい。「それ」系間投詞は、聞き手に焦点をあわせようとする、特定の意識のもとにおこなわれる。聞き手への意識（――さらに言えば呼びかけ強調の意識）が、内面から形を支え、「ソー」の段階にとどまらせた（あるいは「ソー」の段階へひきもどした）とも想察されるのである。「ソー」の待遇品位が「シェー」より高いという事実も、ここにあわせてとりあげてみることが、右の成立を考えるうえに有効であろう。

それにしても、「シェー」の、比較的よくみられる「島前」の事態がある。両系の諸事象の分布状況については、なお究明の余地があろう。いずれにしろ、両系の間投詞が、単純な音韻変化の結果、生じたものでないことは、ここで認めておくことができると思う。

八

以上、隠岐方言の間投表現をとりあげた。指示代名詞「これ」「それ」両系の間投詞が、文表現の間投部に立って、盛んな活動をみせているのである。概して言えば、「これ」系が、話し手の一方的な訴え、もしくは主張の情感を表わすのに対して、「それ」系は、聞き手に焦点を合わせようとする、話し手の特別な意識を表わす。両系間投詞があい寄って、生活表現のための、顕著なはたらきを示しているのである。

右の間投詞のうち、「これ」系間投詞は、中国本土部でも盛んである。（既述）「それ」系間投詞も、岡山県下に「セー」がある。このような事態からして、上述の隠岐方言の間投詞の活動も、当方言に孤立した現象ではないと言えるのである。

山陰の海上に孤立する隠岐方言は、古来、中国方言を特色づけてきた事象を、現前の方言状態のなかに保有しがちであり、また、これらの事態のうえに、新たな特質を醸成してもきた。隠岐方言の全的記述は、史的事実としての中国方言を、統一的に把握するうえにも、一定の意義を有しているのである。

間投表現法は、右の記述体系のうちの、重要な事項である。この討究によって、方言表現生活の特質を明らかになし得る面が少なくないと思うのである。

〈付　記〉
本稿は、藤原与一先生の御指導を賜わって成ったものであります。ここに、あつく御礼申しあげます。

―熊本女子大学助教授―